

“なん者”(忍者の卵)になりたい 品川区立西大井保育園(東京都品川区)

【5歳児】

5歳児の子どもたちが、毎日楽しみに読んでもらっている「なん者ひなた丸」の本(作:齊藤 洋 出版:あかね書房 定価945円)には、「なん者”(忍者の卵)“にん者”(現役忍者)“ぬん者”(忍術を極めたご隠居忍者)」が出てくる。子どもたちは園生活の中で日常的に忍者の修行と言い、いろいろな体を動かす遊びに挑戦している。



「なん者ひなた丸」の本に登場する“ぬん者・雲隠れ三蔵”から手紙をもらった。

<内容> 「なん者」になるためには、大縄跳びの術2つ()をクラスの全員が 月 日までに跳べるようになること

ほし組だけの秘密である。

- ・くもの巣渡りの術・・・張り巡らした縄を、両足を揃えてリズムカルに飛び越す
- ・波越えの術・・・大波・小波をリズムカルに跳ぶ

<手紙を読んだ子どもたち>「どうして?」「すごいや!」「ぼくたちのこと、何で知っているの?」と驚いていたが、早く“なん者”になりたい!と、縄跳びにどんどん夢中になっていった。



2つの術をマスターした子どもたちが、日を追うごとに増えていった。

子どもたちの変化

- できるようになるために、どうすればいいか考えるようになった。
- 「やってみよう」という気持ちが続くようになった。
- 達成感を味わい、もっと難しいことをしたいと思うようになった。
- 友達を成功を喜べるようになった。
- 友達や保育士に認めてもらうことを素直に喜び、励みにしていた。
- 自分から次の目標を立て、取り組もうとする子どもがいた。

そんな中・・・B男は、なかなか波越えの術(大波・小波)を成功させることができなかった。

B男は期日など気にせず、自分のペースで縄跳びを楽しんでいた。“ぬん者・雲隠れ三蔵”からの手紙には、「**クラス全員ができたら～**」と、書いてあるため、B男に対し苛立ちを隠せない子どももいた。

ある日の会話より～

- A男「B男は、まだできないんだ」
B男「だいじょうぶだよ、できるよ!!」
・B男の順番になった。
A男「ほーらあ、できないじゃん! 跳び方おかしいし...」
B男「そんなことはないよ、できるようになるもん!」

- ・そばにいた女児が2～3名集まってきて、B男に対する言い方が「よくない」と、A男に注意する姿があった。
- ・A男の言葉などまったく気にせず、B男はその後自分のペースで波越えの術に挑戦していた。
- ・時々、何人かの友達が一緒に縄跳びしようと誘ったり数を数えて盛り上げようとしたりと、徐々に周りの目がB男に向き、応援するような声かけが増えてきた。

B男の波越えの術の、成功を見ないまま“ぬんじゃ・雲隠れ三蔵”から指定された日がやってきた……。

当日の様子・・・一人ずつ、順番に術を披露していく。着々と友だちが成功する中、B男の番になった。周りの子どもたちは、半ば諦め半分だったり、期待することもなくしゃべり始めたりする子もいた。

保育士「B男くん、いくよ!せーの!!・・・」

・B男、すぐに縄に足をとられてしまう。

保育士「もう1回いくよ。せーの!!・・・」

B男「あ～、だめだ・・・跳べないなあ・・・」

・先日、言い合いになったA男がB男に駆け寄ってきた。

A男「ねえねえ、(やってみせながら)縄がこうやってきたら、ピョンと跳べばいいんだよ。あとさ、先生のもっている縄の動くのをちゃんと見ていれば、絶対跳べるからね!!」

B男「あ、ありがとう」(少し驚いた様子)

保育士「それじゃあ、いくよ。せーの、1・2・3・4・5・・・」

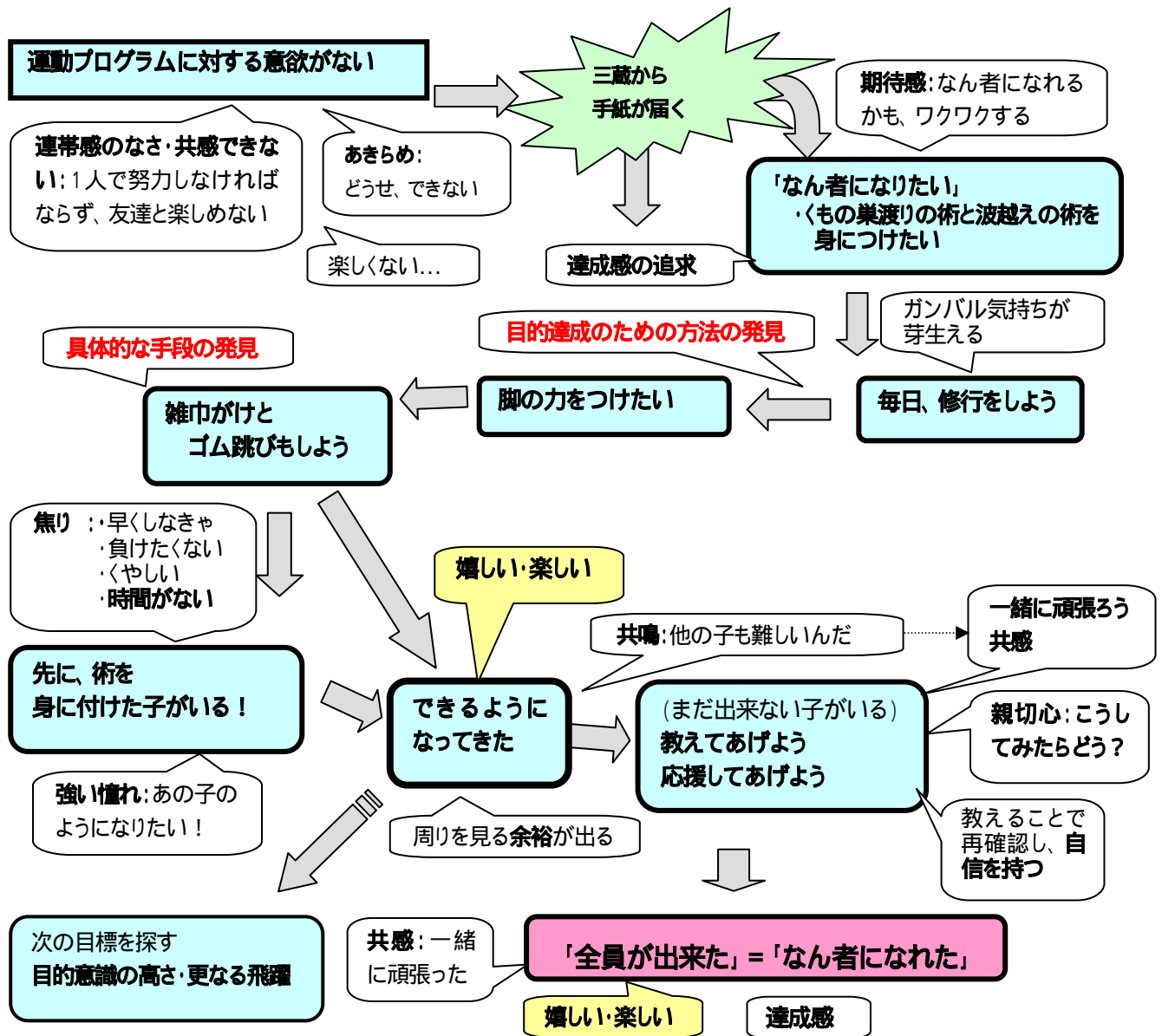
・周りの子どもたちが注目しはじめ、一緒に数える子もいた。

B男・子どもたち・保育士「やったあ～!!跳べた!」

・B男は全身で喜びを表していた。A男も笑顔だった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
に～んじゃ にんじゃ
いっかい いっかい





【分析】

- ・ A男は、ぬんじゃの指定した期日を理解していた。わかろうとしないB男にいらだっていた。
- ・ A男は、自分ができるようになったので、なかなか成果が上がらないB男の状況を受け入れづらかった。
- ・ B男は自分のペースで楽しみながら修行をしていた為、A男の言葉も気にならなかった。
- ・ A男は、周りの友だちがB男に教えたり励ましたりする様子や、B男の姿を見て受け入れようとした。
- ・ B男は、A男に教わったことで跳び方のコツをつかんで成功し、達成感を得た。
- ・ A男もB男を励ましたことで、相手を理解する気持ちが芽生えた。

【考察】

上の図のように、いろいろな要因が心の変化につながっている。友達に言われて気付くこともあれば、友達の様子を見て、自分で気付くこともある。しかし、いずれの場合も人とのかかわりの中で、心も体も成長していくということが分かった。

みどころ

この事例から、子どもたちは何かを「できるようになる」ために、「体をどのように動かしているか」「使うものをどのように動かしたり使ったりしているか」感じながら、目的を目指していることが分かります。そのため、技能の獲得を目指して漠然と繰り返しているだけでなく、幼児なりに「縄をよく観る」「リズムや曲・歌に合わせる」など、互いの挑戦している様子を感じて刺激し合ったりポイントになることを伝え合ったりしています。このように、技術の獲得に関する体験を通して、実感しながら「何が違うのか」「どう工夫するか」感じたり考えたり試したりする中に、「科学する心」の育ちを捉えることができます。